

第1章 はじめに — 談話モデルとは何か

言語は様々な観点から研究することができる。我々の立場は、言語を研究するには、その言語の抽象的な文法構造だけではなく、実際にその文法規則を用いて発せられたメッセージが、話し手と聞き手の形成する発話の場において、どのように交換され処理されるかを考えなくてはならないというものである。その意味で、我々が研究対象とするのは、文ではなく談話である。

まず談話を次のように定義することから始めよう。

談話とは

- a) 話し手と聞き手のあいだの共同作業によって
- b) 時系列に沿って
- c) 局所的に構築される心的対象である。

実際の談話例をもとに、上の主張の正当性を確認してみよう。

(1) 談話例 1²⁾

A : He's got a m- He got a bicycle.

B : Y'get it all the time. He always bring his bicycle in and outta the house.

A : And he does... He does his...

B : Bicycle?

A : Yeh.

B : Him.

A : Yeh.

C : But I can't figure this guy with a bicycle.

(2) 談話例 2³⁾

A : [132] je vous ai pas fait le devis parce que euh [133] nous c'est l'habitude [134] on fait d'abord euh ...

B : oui un plan comme ça pour voir un peu

上の例の示すように、実際の談話では、話し手と聞き手のあいだでピンポンのように言葉のやり取りが行われ、全体としてひとつの流れのある談話を形成している。

また、話し手が中断した発話を、聞き手が完成している例も含まれている。談話が話し手と聞き手のあいだの共同作業として構築されるということには、次の諸点が含まれるだろう。

談話における共同作業

- a) 話題の一貫性 topic continuity / cohesion
- b) 会話の順番取り turn-taking system
- c) 互いの知識状態のアセスメント

「話題の一貫性」は、話し手と聞き手とがひとつの会話セッションのあいだ、ひとつの話題をめぐって一貫した話をするをいう。cohesionを保証する手段には次のようなものがあるとされている。

(3) 結束性cohesion の手段⁴⁾

- a) 指示 reference
 - cf. The cops chased the robbers. They caught them.
- b) 代入 substitution
 - cf. My axe is too blunt. I must get a shaper one.
- c) 省略 ellipsis
 - cf. What are you doing? — Ø Buying a teapot.
- d) 接続 conjunction
 - cf. They fought a battle. Afterwards, it snowed.
- e) 語 word
 - cf. I've been to see my great-aunt. The poor old girl's getting very forgetful these days.

「話題の一貫性」を保証する言語的手段は、ひとつの談話のなかで、ある対象について話し続けるという作業が、円滑に運ぶことを可能にしている。また文と文とのつながりを、話題と意味の側面から保証している。

この種の言語的手段の機能は、Halliday の言うように、cohesion というテキスト機能的観点から見ることでもできるが、話題となっている対象に注目するならば、「指示の探索方略」reference tracking system と規定できる。このシステムのおかげで、ひとつの談話で同じ指示対象について話し続けることができるのであり、話し手と聞き手は、「協調的に」このシステムを運用すると考えられる。このような共同作業がなければ、談話はばらばらなまとまりのないものになってしまう。

言語がどのような reference tracking system を持っているかは、コードに基礎を置くアプローチが問題にすることである。一方、談話モデルのアプローチでは、このようなシステムが、実際の談話のなかでどのように働くかという側面に規則性を見いだそうとするのである。

「会話の順番取りシステム」は、話し手と聞き手のあいだで発言権をスムーズに交替するためのシステムである。参考までに Sacks らが考えた規則をあげておく。

(4) 会話の順番取りシステム⁵⁾

- a) If the current speaker selects a next speaker in current turn, then current speaker must stop speaking, and that next speaker must speak

next, transition occurring at the first transition-relevance place after next-speaker selection.

b) If current speaker does not select next speaker, then any (other) party may self-select, first speaker gaining rights to the next turn.

c) If current speaker does not select next speaker, and no other party self-selects under option (b), then current speaker may (but need not) continue.

談話とは、話し手と聞き手がいて、その両者が役割を交替しつつ、組み立てて行くものである。その際にどのようにして役割交替がスムーズに行われるかを記述したものが、上の順番取りシステムである。

このように話し手と聞き手とがお互いの態度を見ながら役割を交替して行くということは、談話とは、話し手と聞き手のあいだの相互行為であることをよく示している。

「互いの知識状態のアセスメント」とは、指示表現の使用にあたって、その指示対象がすでに聞き手に知られているものかどうかといったアセスメントをいう。知識状態のちがいが言語マーカーに反映されることがあることは、よく知られている。

(5) 知識状態のアセスメント⁶⁾

会話例 (1)

A : 田中さん、どこか外国に行ったんだってね。

B : うん、アメリカに行ったんだ。

A : 彼にドイツ語の通訳を頼もうと思っていたんだけど、残念だな。

会話例 (2)

B : ドイツ語なら、彼よりよくできる人がいるよ。

A : へえ、じゃその人紹介してくれないかな。

B : 山田っていうんだけど、三年ほどドイツに留学して、去年からうちの大学で教えている。

A : {?山田さんは / ?彼は / その山田さんは} 通訳の経験があるのかな。

この例の示すように、Bは山田さんを知っているが、Aは知らない。知らない人を表す固有名詞が談話の持ち込まれた場合、知らない話し手はそれを「山田さん」という裸名詞や「彼」という代名詞でさすことはできない。「その山田さん」というように、指示詞をつけて、その知識が相手領域にあるということ（つまり自分のスペースにないということ）を言語的に明示する必要があるのである。

談話が「時系列に沿って」構築されるということは、上の会話例でもわかるように、談話が時間軸に沿って直線的に展開するものであることを意味する⁷⁾。そして、普通は、先行談話には記憶を通してしか戻ることができない非可逆的なものである。

さて、談話をこのように規定する言語の見方は、従来の言語観と次の点で異なることに注意しよう。

(A) 超越的コードの否定

Saussure に代表されるような、普遍的で、すべての言語共同体の成員に共有されており、常にメッセージの産出を規定するような超越的コードは否定される。それに代わるのは、談話構築にかかわる局所的コードである。

(B) 相互作用 interaction としての言語観

超越的コードという考え方に代わるのは、言語を話し手と聞き手の相互作用として見るとらえ方である。この見方によれば、現実の談話を作り上げるのは、超越的コードよりは、話し手と聞き手の互いを考慮した微視的な相互作用が最も重要な要因となる。

(C) 話し手と聞き手の非対称性の認識

超越的コード言語観では、話し手と聞き手とはまったく同じコードを共有し、言語の産出に対称的にかかわる。しかし相互作用としての言語観においては、話し手と聞き手の談話構築へのかかわりかたは、対称的ではなく非対称的なものとなる。それは、話し手は自分が話すことを既に知っているが、聞き手はまだ知らないという理由による。このことは、指示と照応の問題を考える上では本質的なものである。

(D) 局所的処理の優先

超越的コードは言語産出を全体的にカバーするが、相互作用言語観においては、そのような超越的コードは存在しないので、話し手と聞き手のあいだの局所的処理が優先する。談話の部分部分におけるミクロ構造の研究が重要になる。そのミクロ構造を制御しているのは、射程の短い局所的コードである。

上にあげた会話の順番取りシステムがことことをよく示している。順番取りシステムが規定するのは、「次の」順番だけであり、「次の次」については何も規定しない。局所的に管理されるのである。

(E) 時系列に沿った処理の優先

局所的処理と関係するのは、時系列的処理である。生成文法のような理想的話者を想定する理論では、文はいちどきに出来上がるかのような印象を与えている。しかし、現実の談話は、言い直し・よどみ・中断・文型の途中での変更・付け足しなどを豊富に含んでいる。話し手は聞き手との相互関係のなかで、時系列的に談話を構築し、また処理すると考えられる。

第2章 談話研究の重要性

超越的コードを否定した言語観においては、談話研究は最も重要なものである。実際に行われた会話を研究することで、談話構築にかかわるミクロ構造と局所的コードの存在を明らかにすることができる。この意味で、このような研究はコーパス主体の corpus-oriented 研究であると言える。

では、従来の言語研究に用いられた材料と、談話研究が用いる材料とはどのようにちがうのだろうか。Lyons は言語学者がしばしば例として用いる文を system-sentence と呼んで、実際の談話で用いられた文 text-sentence と区別している。

(6) system-sentence vs. text-sentence

“We can now distinguish between the sentence as something that can be uttered (i.e. as the product of a bit of) language-behaviour and the sentence as an abstract, theoretical entity in the linguist’s model of the language-system. When it is necessary to distinguish terminologically between these two senses we will use text-sentence for the former and system-sentence for the latter. (...) System-sentences never occur as the products of ordinary language behavior. Representations of system-sentences may of course be used in metalinguistic discussion of the structure and functions of language ; and it is such representations that are customarily cited in grammatical descriptions of particular languages.”⁸⁾

Lyons によれば、system-sentence は言語体系を記述するモデルのなかで用いられるものであり、実際の発話のなかでは決して生じない。にもかかわらず、言語学者が相変わらず system-sentence を使い続けるのは、言語学者の研究目標が構造としての言語を研究することだからである。

このように system-sentence のみを研究対象にしてきたことが、言語研究を歪めたとまでは言わないまでも、ある特定のバイアスをかけてきたことは事実である。このことを、ひとつ例を挙げて見てみよう。

(7) ... but then he decides he’s gonna ... he’s gonna take the whole basket. Um ... then he drives a ... he rides away on his bicycle. A..nd.. oh goodness. And he’s as he’s riding through an open field ... um hills in the background, and stuff like that, he .. um a girl with long pigtailed.. happens by, going the other way, on a bicycle, and there’s a long shot, you see both of them, ... converging, and you see him.⁹⁾

この例にみられる text-sentence と特徴には、次のようなものがあげられるだろう。もちろんこれは網羅的なものではない。

a) 文の中断

but then he decides he’s gonna

b) 動詞・構文の途中変更

he drives a ... he rides away

c) 文型に収まらない補足的要素

as he’s riding through an open field ... um hills in the background, and stuff like that

d) 接続表現の多用

and, then, etc.

e) ためらいと中断

A..nd.. oh goodness

f) 対話相手への頻繁な言及

you see both of them, ... converging, and you see him.

第3章 談話モデルに向けて

では上のような認識に立つとき、どのような談話研究のアプローチを試みればよいのであろうか。Brown & Yule¹⁰⁾ は言語を研究する場合の理論的立場として、次の3種類の対象の捉え方があるとしている。

a) sentence-as-object

b) text-as-product

c) discourse-as-process

それぞれの立場は、次のように特徴づけられている。

sentence-as-object の立場

“His (=sentence-grammarian’s) data consists of a set of objects called 'the well-formed sentences of a language', which can exist independently of any individual speaker of that language. We shall characterise such a view as the sentence-as-object view, and note that such sentence-objects have no producers and no receivers.”¹¹⁾

これは従来の文中心の立場であり、話し手と聞き手の不在によって特徴づけられる。本稿の立脚する談話モデルは、このような立場の対極にある。

text-as-productの立場

“In this view, there are producers and receivers of sentences, or extended texts, but the analysis concentrates solely on the product, that is, the words-on-the-page. Much of the analytic work undertaken in ‘Textlinguistics’ is of this type. Typical of such an approach is the ‘cohesion’ view of the relationships between sentences in a printed text. In this view, cohesive ties exist between elements in connected sentences of a text in such a way that one anaphoric element such as a pronoun is treated as a word which substitutes for, or refers back to, another word or words. (...) We shall describe such an approach as deriving from a text-as-product view .”¹²⁾

discourse-as-process の立場

“In contrast to these two broadly defined approaches, the view taken in this book is best characterised as discourse-as-process view. (...) We shall consider words, phrases and sentences which appear in the textual record of a discourse to be evidence of an attempt by a producer (speaker/writer) to communicate his message to a recipient (hearer/reader). This

is clearly an approach which takes the communicative function of language as its primary area of investigation and consequently seeks to describe linguistic form, not as a static object, but as a dynamic means of expressing intended meaning.”¹³⁾

text-as-product viewと discourse-as-process viewのちがいは、前者は出力としてのテキストを最終的な研究対象とするのにたいして、後者は産出されたテキストは、それを生み出したより豊かでダイナミックな言語行動の単なる表層現象にすぎないと考えるところにある。discourse-as-process 的研究の目標は、表出しているテキストを手がかりとしつつも、その背後にある「過程としての談話」 discourse as process を再構築することにある。

このちがいを表すために例をひとつ見てみよう¹⁴⁾。

(8) a. Wash and core six cooking apples . Put them into a fireproof dish.

b. Kill an active, plump chicken . Prepare it for the oven, cut it into four pieces and roast it with thyme for one hour.

Halliday & Hasan 流のtext-as-product の立場に立つならば、(8) a. のthemは six cooking apples の “substitution” であるということになる。ところがこのリンゴは、文の述語 (wash / core) によって変容を受けている。リンゴは洗って芯を抜かれているのである。したがって them がさすのは最初のリンゴではなく、“the six cooking apples that are washed and cored “であるということになる。同様に(8)b. のit は an active, plump chicken → it₁ → it₂ → it₃ という照応の連鎖を成しているが、it₃ はすでに丸ごとのchickenではなく、いくつかに切られて形が変わってしまっている¹⁵⁾。

このように text-as-product の見方に立つと、代名詞などの照応表現は、先行テキストのある語群を、より省略的な言語形式で代用しただけということになるが、このような考え方では上の現象を正しく捉えることができない。談話の進行とともに、指示対象が刻々と変容を被る場合、談話の流れを心的モデルに基づいてダイナミックに捉えなくては、照応詞の振る舞いをうまく説明できない。

また Halliday & Hasan 流のアプローチにとって一層深刻な問題は、先行詞を持たない照応表現や、先行詞と照応詞の不一致が、実際の談話では珍しくないということである。次の例を見てみよう。

(9) a) one had a uh ... I dont' know what you call them , but it's a paddle, and a ball .. is attached

to the paddle, and you know you bounce it?

b) Even an apprentice can make over twenty pound a week and they don't get much tax [taken] from that.

c) Le Ministre de l'Education Nationale est en vacances. Elle séjournera deux semaines au bord de la mer.

(9)a.では先行詞のない代名詞 *them* が使われている。b.では *they* の先行詞 *an apprentice* は単数なので、先行詞と照応詞のあいだで数の不一致がある。c.では代名詞は *elle* で女性形だが、先行詞は *le ministre* で男性名詞であるので、性の不一致が認められる。このような例は、照応表現は先行詞の単なる“substitution”だとする見方では説明できない。

上の(9)a.の例はとりわけ示唆的である。話し手は見たばかりのビデオの内容を話すように求められていて、ビデオで見た遊具をさす言葉が見つからなくて困っている。その対象は先行文脈に言語的切片としては現れてはいないが、話し手にとっては *them* でさす対象はすでに自分の頭のなかにある。話し手はその頭のなかの対象を *them* でさしているのである。

このような例を見ると、先行文脈としてのテキストの範囲のみで先行詞と照応形の問題を考えているだけでは限界があることがわかる。

それでは紙の上の文字の範囲を超えて、指示と照応の問題を考えるためのモデルはどのようなものだろうか。我々は世界についてのある表示を心内に持っている。ある出来事が起きたり、人物が現れたりすると、それらはこの心内の表示につけ加えられると考えられる。このように何かが起きる度に、われわれの心内の世界の表示は少しずつ変容を被っていく。談話の進行に伴ってダイナミックに変化していく、このような心内の表示を、*discourse model* と呼ぼう。

第4章 談話モデルと談話の指示物

4.1. Discourse Model

われわれは特定の談話行動以前に、すでに現実世界についての心的表示を持っている。特定の談話行動によって生み出された *discourse representation* は、この既存の世界の心的表示に付加されるか、あるいはその一部を更新する。従って、世界の心的表示は、談話の進行にともなって、刻々とその姿を変えていく動的なものになる。

ではこのような心的表示にファイルされる情報とは、どのようなものだろうか。それは大まかに言って、「命題的内容」と、「人や物」と考えられる。

「命題的内容」とは、われわれが世界について持っている知識を、文の形で表現したものである。例えば、「地球は丸い」「夏は暑い」「Xさんは厳しい人だ」など。

「人や物」は、知識に登場するものである。われわれの世界知識には、誰でもが共通に持っている知識に属する「地球」「犬」のようなもの、特定の国や文化に依

存する「子供の日」「納豆」、特定の地域に依存する「賀茂川」「百万遍」、特定の個人に依存する「従兄弟の修君」などの、人や物が蓄えられていると考えられる。

一方、話し手と聞き手のあいだで特定の談話が交わされる場合、その談話の進行に従って、談話によってもたらされた情報が聞き手の心的表示に付加されていく。

ここで注意しておきたいのは、この心的表示は談話の進行とともに、自動的に作成されるのではなく、常に話し手と聞き手とのあいだの相互作用 interactionを通じて「構築される」という点である¹⁶⁾。

このように談話の進行とともに、話し手と聞き手のあいだで構築される心的表示のことを、Discourse Modelと呼ぶことにする。

4.2. 談話の指示物 Discourse Referent

上にも述べたように、discourse model のなかには、様々な指示対象が登録される。Karttunen にならって Discourse Referent¹⁷⁾ と呼んでおこう¹⁸⁾。以下必要に応じて DR と略記する。

さて、談話の指示物はどのような形で談話に登場し、また言及されるのだろうか。一般に、談話の指示物は次の言語的手段により、導入・言及される考えられる。

- a) 固有名詞 Proper Name
ex. I saw Augustus yesterday at the station.
- b) 不定名詞句 Indefinite Noun Phrase
ex. I saw a strange man in my neighborhood.
- c) 定名詞句 Definite Noun Phrase
ex. He said the man with a bow tie is a spy.
- d) 照応表現 Anaphoric Expressions
ex. You know what they did to me.

固有名詞は、聞き手のDiscourse Modelのなかに登録済みの対象に言及するものである¹⁹⁾。ここには、「コロンブス」や「織田信長」のように、我々が世界について持っている百科事典的知識も含まれる。

聞き手の discourse model に登録済みでないと、次のような対話が生じる。

- (10) A : I saw Augustus yesterday at the station.
B : Augustus? Who is Augustus?

聞き手の Discourse Model に未登録の対象については、特別の言語形式を用いなくてはならない。それにより、結局は不定名詞句として導入することになる。

- (11) a. Yesterday I met a man named Augustus .
b. A (certain) Mr. Brown came to see you.

日本語の場合は、「～という人」「～という町」のように、普通名詞として導入する必要がある。

- (12) a. 昨日寅次郎という人が訪ねて来ました
b. 私は三隅町という町で生まれました

またついでながら、聞き手のスペースに未登録の人は、物扱いされることにも注意しよう。

- (13) A: 昨日、柴田宏治さんに会いましたよ。
B: {それは /*彼は} 誰ですか。

4.3. discourse referent はどのように談話に導入されるか

さて、それでは DR はどのような場合に、discourse model に登録されるのだろうか。

Karttunenは、DR が確立されると、それを後続談話で定名詞句や代名詞で照応できるという事実を重視している²⁰⁾。

- (14) Bill has a car . It/The car/Bill's car is black.

この例では Bill has a car. という文により、Discourse Modelの内部に DR [a car] が導入される。いったん導入されたこの DR は、それ以後の談話においては照応による言及の対象となるのである。

不定代名詞が用いられているにも関わらず、述語名詞句はDRを確立しない。

- (15) a. John is a linguist.
b. John is the best student.

また否定の文脈も同様である。

- (16) Bill doesn't have a car. *It/*The car/*Bill's car is black.

様態動詞は一般に、DRを確立しないか、曖昧性を生む。

- (17) a. John wants a car . *It is black.
b. You must write a letter to your parents. *They are expecting the letter.
c. Bill can make a kite . *The kite has a long string.
d. Mary expects to have a baby . *The baby 's name is Sue.

このように名詞句で確立された DR が、談話のなかでどの程度持続して存在するかという点について、Karttunen は興味ある指摘をしている。

上で見たように、must, wantなどの様態動詞は、一般に DR を確立しないか解釈が曖昧である。ところが Karttunen が short term referent と呼ぶ次のような例では、定名詞句による照応が可能であり、DRを確立しているように見える。

- (18) a. You must write a letter to your parents and mail the letter right away.
b. John wants to catch a fish and eat it for super.
c. I don't believe that Mary had a baby and named her Sue.

これは名詞句が様態動詞のスコープの内部に留まっているからである。スコープから出ると、DR は存在しなくなる。

- (19) You must write a letter to your parents and mail the letter right away. *They are expecting the letter.

またこれと同じ理由により、仮定された世界においても、DRは確立されることがある。

- (20) a. Suppose Mary had a car. She takes me to work in it. I drive the car too.
b. If Mary has a car, she will take me to work in it. I can drive the car too.
c. If Mary had a car, she would take me to work in it. I could drive the car too.

だが次のようにするとだめになる。

- (21) I wish Mary had a car. *I will drive it.

Karttunen は次のような条件があると考えている²¹⁾。

"That is, fictitious individuals may be referred to anaphorically only as long as the proper fictitious mode is sustained, but when the illusion is broken, they cease to exist."

これはメンタル・スペース理論の用語で置き換えれば、「同一スペース内であるかぎり、照応的に指示できる」と表現できるだろう。

しかし、これはさらに一般的な「指示領域」domain of reference という概念に包摂されるべき問題である。本稿ではこれ以上展開することができないので、可能性を指摘するに留める。

Karttunen が触れていないのは、総称名詞は DR を確立するかという問題である。

- (22) a. Un soldat français résiste à la fatigue.
b. The lion is a mighty hunter.

総称名詞句は、指示的な名詞句とは異なり、定名詞句による忠実照応ができないことが知られている。

- (23) a. A lion came into the classroom. All the students were terrified.
The lion roared twice and went out.
b. A lion is a mighty hunter. *The lion can run faster than the other animals.

上に触れた Karttunen の基準に従えば、この結果からは総称名詞は DR を確立しないという結論が得られそうだが、事はそれほど簡単ではない。総称名詞は代名詞による照応は可能だからである。

- (24) a. Un cheval est un mammifère. Il se laisse domestiquer.
b. Un chien, quand on l'attaque, il se défend.

これを見ると Karttunen の提案する判定基準は不完全なものだということがわかる。この問題については、定名詞句照応と代名詞照応のちがいについての、さらに詳細な研究が必要である。

第5章 照応表現の問題

この章では、上のように定義された discourse model の考え方に立脚して、指示表現と照応の問題を考えてみよう。

5.1. Identity of sense anaphora / Identity of reference anaphora

ここでまず照応をふたつに分類する。次の例を見よう。

- (25) a. Though George was able to afford a brand-new car , Denis could only afford a second-hand one .
b. George's car was brand-new, but Denis' \emptyset was second-hand.
(26) a. Alors que Gorges pouvait s'offrir une voiture toute neuve, Denis devait se contenter d'une \emptyset d'occasion.
b. Pierre a vendu sa voiture pour en acheter une autre.

このタイプの照応を、次のような普通の例と比較すると、そのちがいがはっきりする。

- (27) a. George could afford a brand-new car , but he is not satisfied with it .
b. George's car was brand-new. It was very gorgeous.

(25) a. では one は car を、b.では Øが car を受けているとされる。しかし、これらの照応表現は、指示対象を持った a brand-new car という名詞句を受けているのではなく、その一部の car だけを受けている。このような照応形式は Identity of Sense Anaphoraと呼ばれることがある。

このタイプの照応の特徴は、次の点である。

- (a) 先行詞も照応詞も、「指示表現」referring expression ではない。談話の世界に指示対象をもたない単なる単語である
(b) 先行詞と照応詞のあいだに同一指示関係がない

Identity of Sense Anaphora はこのように、discourse model の中に登録された DR をさすことがない。

Identity of Sense Anaphoraには、いくつか注目すべき特徴があることが知られている。

まず英語では通常可能な、助動詞削除が許されない。

- (28) Paul Anderson is fat , and {I am / *I'm } Ø too.

また、フランス語では、Identity of Sense Anaphoraでは、先行詞と照応詞のあいだに、先行詞と照応表現のあいだに性・数の一致がない。

- (29) a. Henri est mélomane et je le suis aussi.
b. Marie est travailleuse et ses frères {le /*la } sont aussi.
c. Ces filles sont paresseuses , mais ces garçons ne {le /*les } sont pas.

このように、Identity of Sense Anaphoraは、DR に言及することなく、先行談話にある先行詞のコントロールのみを受けているといえる。

5.2. Linguistically Controlled Anaphora / Pragmatically Controlled Anaphora

次に言語的コントロールを受ける照応と、語用論的コントロールを受ける照応の区別を試みる。

(30) Linguistically Controlled Anaphora ²²⁾

- a. My brother is a doctor, and he says your hair will fall out if you eat that.
- b. Anyone who eats that will lose his hair.

(31) Pragmatically Controlled Anaphora

- a. [Hankamer observing Sag successfully ripping a phone book in half]
I don't believe it .
- b. [Hankamer points gun offstage and fires, whereupon a blood-curdling female scream is heard]
I wonder who she was?

(30) a. b. の照応的代名詞 he と所有形容詞 his は、適切な先行詞 my brother と anyone を先行文脈に持っている。代名詞は、人称・数・性などについて、先行詞と一致している。これを「言語的にコントロールされた照応詞」Linguistically Controlled Anaphoraという。

一方、(31)a. b.では、代名詞 it, she の先行詞が先行文脈にはない。(31)a. の it は、話し手の目の前で起きた出来事を直接にさしている。また、(31)b.では she は叫び声を発した女の人を、直接にさしている。このような照応は、言語的文脈には適切な先行詞がなく、多くは発話の現場で話し手と聞き手のあいだで了解された指示対象をさすので、これを「語用論的にコントロールされた照応詞」Pragmatically Controlled Anaphoraと呼ぶ。

この「言語的コントロール」と「語用論的コントロール」をめぐっては、様々な議論が展開されてきた。それは、照応表現の先行詞はどこに存在するかという問題と深く関わっている。

たとえば McCawley は人称代名詞には、必ず先行文脈に先行詞が存在すると考えている。先行詞のない代名詞は、彼にとっては直示的用法である。

“If a personal pronoun occurs in a sentence which does not contain an antecedent for that pronoun, then either the pronoun has an antecedent in some preceding sentence in the discourse (possibly a sentence uttered by someone other than the speaker) or that pronoun is used deictically (i.e. is a direct reference to someone or something physically present as the sentence is uttered) and is stressed and accompanied by a gesture.” ²³⁾

Postalはこれとは逆に、代名詞が何か先行詞の代理をしているという考え方を否定して、いかなる場合も、代名詞は発話の時点で話し手にとって知られている対象をさすにすぎないとする。

“The idea that a form like she in she dances well is a

‘replacement’ or ‘substitute’ for some other noun, say in ‘discourse contexts’ or the like, seems to me completely without basis. Such an assumption explains nothing for the quite simple reason that there is nothing really to explain. It is quite sufficient to indicate precisely that such forms refer to object-types whose particular referents are assumed by the speaker to be known to the person spoken to.”²⁴⁾

McCawley のように、代名詞には必ず先行詞があるという考え方にとって問題になるのは次のような例である。次例では言語的に表現された先行詞がないにもかかわらず、代名詞は複数の them になっているが、この複数がどこから来たのかを説明することができなくなってしまう。言語外的指示対象としてのズボンは単数だからである。

(32) [John wants his pants that are on a chair and he says to Mary]
 Could you hand them / *it to me, please?

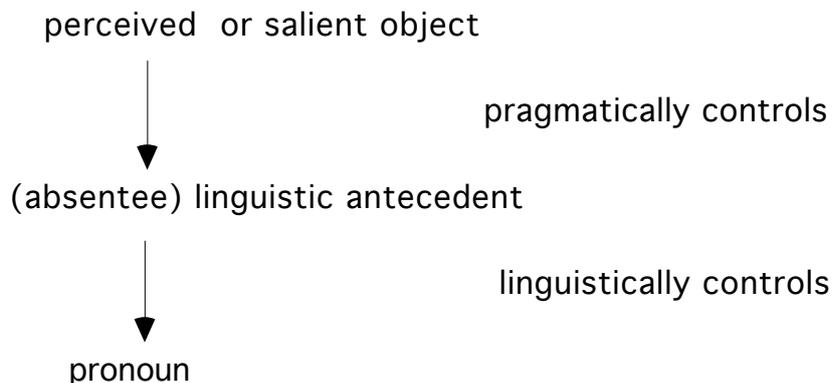
また次の例を見てみよう。

(33) [seeing a rattlesnake three feet away]
 a. Watch out, it bites without warning !
 b. Watch out, they bite without warning !

目の前にいる蛇は一匹である。it は単数形なのでよいとして、they の複数形はどこから来たと考えればよいのだろうか。先行詞がない場合は直示的用法だとする McCawley の見方では、これを説明することができない。

この矛盾をどのように解決すればよいか。Tasmowski & Verluyten²⁵⁾ は、いかなる場合も代名詞には先行詞があるが、その先行詞は潜在的でありうるとして、代名詞の用法に統一した説明を与えようとしている。以下彼らの説とその問題点を検討してみよう。

彼らの考える図式は次のようなものである。



これによれば、発話の現場などにある salient な事物が、「不在先行詞」を語用論的にコントロールする。こうして構築された先行詞が、代名詞を言語的にコントロールする。この図式によれば、発話の現場の事物が直接に代名詞を語用論的にコントロールするという事はないことになる。

まず、次の例文を考えてみよう。

(34) [John is trying to stuff a large table in the trunk of his car. Mary says]

Tu n'arriveras jamais à la / *le mettre dans la voiture.

(35) [Same situation, but with a desk]

Tu n'arriveras jamais à le / *la mettre dans la voiture.

この例では、言語的に明示された先行詞がない。しかし、代名詞は(34)では la tableに、(35)ではle bureauにと、それぞれ性の一致が見られる。本当に現場指示的であれば、物には本来性の区別はない。ならば、代名詞には現場指示的な ça を用いているはずである。ここで性の一致があるということを根拠にして、Tasmowski & Verluytenはこのような場合にも、「不在先行詞」が代名詞を言語的コントロールをしていると考えるのである²⁶⁾。

では指示表現が、言語的コントロールをまったく受けず、語用論的コントロールのみを受けているという場合はあるのだろうか。彼らは次のケースがそうだという。

(36) a. Sandy is a very good instructor.

b. That man / The man works too hard.

c. The professor we just talked to flunked me last year.

d. That / The bitch flunked me last year.

e. That one is a real bitch.

f. Lui, c'est une vraie vache.

ここで唯一の代名詞の lui に注目しよう。Tasmowski & Verluyten によれば、常に言語的コントロールを受けている le / la / les 系列の代名詞とは異なり、lui / elleなどのいわゆる強勢形人称代名詞は、語用論的コントロールを受けることができる。とされる。

le / la / lesの系列の代名詞は、人も物もさすことができる。

(37) a. [Paulがやって来るのを見て]

Ah ! Le voilà qui arrive.

b. [万年筆 (le stylo, masc.)をさしながら]

Tu peux me le prêter?

ところが、lui / elle系列の代名詞は、外部指示的に用いた場合、人しかさすことができないという特徴がある。

(38) a. [パーティーである人をさして]

Lui , c'est un vrai crétin.

b. [デパートでワイシャツ (la chemise, fem.)を見て]

Ça / *Elle , c'est une très belle chemise.

このような場合物をさすには ça を用いねばならない。物をさす場合は、性と数の区別がないことに注意しよう。

(39) [UFOのような物体を見て]

a. *Tu le / la vois?

b. Tu vois ça ?

(40) [UFOのような物体をふたつ見て]

a. *Tu les vois?

b. Tu vois ça ?

もし le / la / les が語用論的コントロールを受けているのならば、現場にある対象の数を直接的に反映するはずだが、この例の示すように、実際には数は反映されない。従って、le / la / les 系列の代名詞は、指示対象から直接に語用論的コントロールを受けているのではなく、指示のプロセスの中間段階で先行詞となる言語表現が、どこかに介在しているのだと考えられる。

一方、強勢形代名詞の lui / elle は人を指すときに限り、先行詞なしに直接的に用いることができる。ここで注意しなくてはならないのは、lui / elle は先行詞の「文法的性」 grammatical gender に一致しているのではなく、現場にいる指示対象の「自然的性」 sex に一致しているということである。

5.3. 照応と範疇化

ではどうして人の場合に限って、代名詞の語用論的コントロールが可能なのだろうか。それは人は、言語表現に先立ってあらかじめ範疇化 catégorisation されているからである。

フランス語で、物を直示的にさす代名詞 ça / ceci / cela などには、次のような特徴があることは周知の事実である。

a) 普通は人をさすことができない²⁷⁾

b) 性・数による語形変化をしない

このふたつは密接に関連している。目の前の訳のわからないものをさして、次のようにたずねることができる。

(41) Qu'est-ce que c'est que ça?

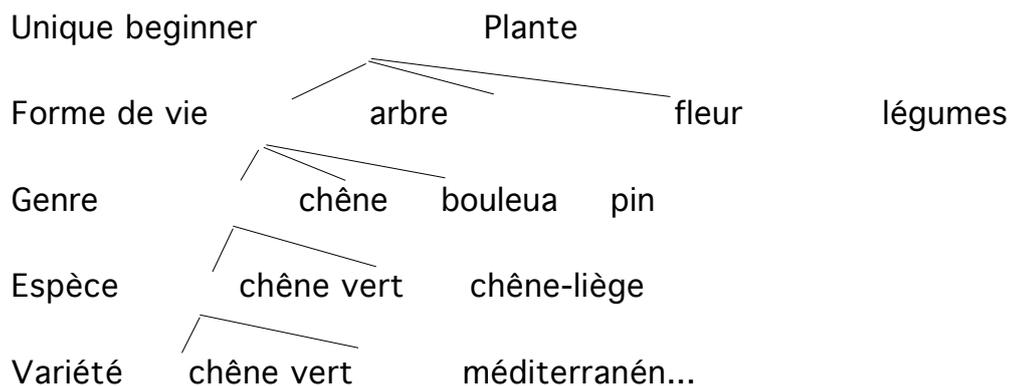
ça はこのように、名称も性も数も不明な指示対象を、直示的にさすことができる。言い換えれば「範疇化」以前の対象をさすことができるのである。物は範疇化の認知的操作をされることで、適切な名称を獲得する。この名称は言語表現であり（一般的には呼び名）、言語表現という形でフランス語ならフランス語という言語的世界に参入することで、初めて文法的性と文法的数とを獲得する。代名詞 ça はこのような認知操作以前の指示対象をさすことができる²⁸⁾。

ça 系列の代名詞は、このような性質のために、逆に範疇化された（つまり言語化された）指示対象をさしにくいという特徴がある²⁹⁾。

- (42) a. ? Je n'ai pas pris ton stylo : cela n'avait pas de plume.
b. ? Prenez l'orange : mettez un zeste de cela dans le plat.

ところが、人はあらかじめ範疇化されている。人が人であることは、自明でいまさら問題にするまでもないことだからである。この意味で、人は言語外的事物のなかでは、特権的地位を占めていると言えよう。

範疇化の問題を考えるときに、よく系統的分類図が引かれることがある。例えば次のようなものである³⁰⁾。



このときに、注意しなくてはならないのは、このような系統樹が当てはまるのは、人以外の生物と物の世界に限られるという点である。生物学の教えるところでは、ヒトは哺乳類、霊長目、真猿亜目ヒト科に属することになっている。生物学的には上の図のような系統樹のどこかに、ヒトを分類することが可能かも知れないが、言語学的には事情はまったく異なる。ヒトはすでに分類済みのものとして、まったく別格扱いされているのである。

人が他の指示対象とは別扱いされている証拠はいろいろある。話を照応に関係する現象に限ると、照応には先行詞と照応詞とのあいだで性・数の不一致が見られる現象が存在する。そのなかで「概念的一致現象」 accord conceptuel と呼ばれている現象では、照応詞は先行詞の文法的性ではなく、自然的性と一致する³¹⁾。

- (43) a. Le Ministre de l'Education nationale est en vacances. Elle
séjournera deux semaines au bord de la mer.
b. Le loup se jeta sur le petit Chaperon rouge et la mangea.

le ministre de l'Education nationale 「文部大臣」は男性名詞であり³²⁾、もしこれと言語的一致をするならば、照応詞は il となるはずである。ところが、文部大臣は女性なので、自然的性に一致して elle となっている。

「赤頭巾」 le Chaperon rouge も男性名詞だが、さしているのは女の子なので、女性形の la で受けている。

指示対象が人間以外の物の場合、このような accord conceptuel はできない。

- (44) *La bicyclette est tombée. Il (=le vélo) est brisée.

その理由は、la bicyclette が持っている「女性」という性は、指示対象に固有に備わったものではなく、われわれが指示対象を la bicyclette と「範疇化」した時点で生じたものだからである。これは新たに範疇化しなおした時点で、キャンセルされてしまう。これにたいして、人間の自然的性は固有のものであり、キャンセルされることがないのである。

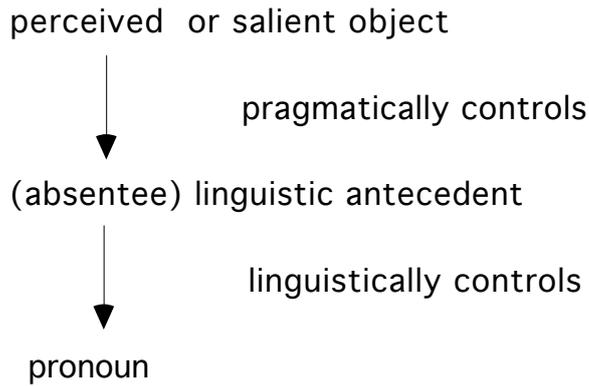
範疇化が更新されると、それまでの性がキャンセルされるということは、次のような例がよく示している³³⁾。

- (45) Quand la baleine sortira de l'eau, je harponnerai le monstre pour
le/*la tuer.

指示対象はいったん la baleine と呼ばれているが、次に le monstre と再範疇化されており、それまでの認知枠はキャンセルされる。従って照応詞は、新たに範疇化に基づいて le monstre と一致する le を用いなくてはならない。

5.4. 潜在的先行詞の可能性

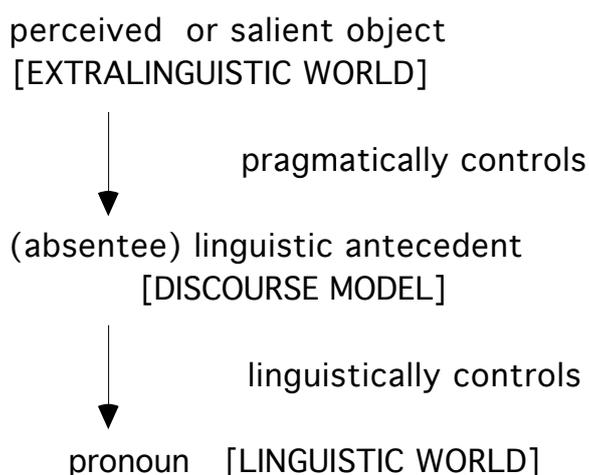
さて、Tasmowski-de Ryck & Verluyten の考えている「語用論的コントロール」の図式に話しを戻そう。もう一度図式を掲載する。



perceived or salient object は指示対象であり、これは言語外的世界 extralinguistic world に所属しており、言語化以前の対象である。また pronoun は実際の言語表現で用いられている代名詞のことで、こちらは完全に言語的世界 linguistic world のなかにある。では、その中間段階とされる (absentee) linguistic antecedent は、どの世界に属するのだろうか。奇妙なことに、Tasmowski-de Ryck & Verluyten は、これに関しては一言も述べてはいない。

われわれの考えでは、この (absentee) linguistic antecedentこそ、談話モデル discourse model に存在する対象なのである。外界に存在する指示対象は、名指しを受けるためには、いったん言語化されなければならない。言語化されたものが談話内に明示的に存在する場合は、通常の先行詞と照応詞の照応関係になる。しかし、談話内に先行詞が存在しない場合でも、言語化は行われていると見なすべきであり、その言語化はここでは談話モデルとして捉えられている、われわれの心的過程のなかで無言のうちに行われているのである。

したがって、Tasmowski-de Ryck & Verluytenの図式をわれわれの考えに従って整理するならば、次のようにならなくてはならない。



さて、ではどのような指示対象でも不在先行詞になれるのかということ、Tasmowski-de Ryck & Verluyten は、厳しい制約があるとしている³⁴⁾。

まず最初に抽象名詞は不在先行詞にはなれない。

(46) [慈善行為を見て]

- a. Que la charité est belle !
- b. *Qu'elle est belle !

これはなぜだろうか。興味深いことに、抽象名詞に関する制約は、連想照応の場合にも見ることができる³⁵⁾。

(47) a. *Ils habitent un quartier central. J'apprécie beaucoup le calme.
b. *Nous avons utilisé ce théorème. La découverte est récente.

この例のように、照応表現が *le calme*, *la découverte* のような抽象名詞のときは、連想照応が成り立たない。その理由はおそらくは、抽象概念の場合は、具体的な事物とは異なり、基本カテゴリーレベルが考えにくいからだと思われる³⁶⁾。

いわゆる語用論的コントロールの場合でも、不在先行詞は基本カテゴリーレベルの名詞でなければならないことが知られている。

(48) [John is trying to stuff a large table in the trunk of his car. Mary says]
Tu n'arriveras jamais à la / *le mettre dans la voiture.

上の例では代名詞 *la* は不在先行詞の *la table* と一致している。*la table* は基本カテゴリーレベルの名詞である。一方、*la table* は上位概念の *le meuble* に包摂される。だからといって、*le meuble* を不在先行詞として、*le* で照応することはできないのである。

具体物とは異なり、抽象概念には基本カテゴリーレベルというものを設定することが難しい。抽象概念が不在先行詞になれないのは、このためだと思われる。

次に Tasmowski-de Ryck & Verluyten は、不在先行詞には次のような制約があるとされている。

「現場にある物Aが、それとメトニミー関係にある別の物Bをさす場合、Bだけしか不在先行詞ににならないことができる」

次がその例である。

(49) [In your living room, a friend picks up the teddy bear your little daughter usually plays with. You say]
a. Tu ne la verras pas, elle est en vacances.

b. *Tu ne le verras pas, il est en vacances.

この例をメンタル・スペース的に解釈すると、次のようになる。所有物 teddy bearは、所有者daughterとコネクタで結ばれている。teddy bearがトリガー、娘がターゲットである。図式的には次のような関係である。



すると、上の例の示しているの、「ターゲットしか不在先行詞になることができない」ということを意味している。

また次の例では、ステーキがトリガー、客がターゲットである。客は男性だとの想定である。

- (50) [In a restaurant, one waiter is informing his colleague]
- a. Cette entrecôte, elle est assise à la table 5.
 - b. *Cette entrecôte, il est assis à la table 5.
 - c. Il est assis à la table 5.
 - d. *Elle est assise à la table 5.

言語化された先行詞がある a. b. の例では、代名詞は先行詞に性数一致している。つまりトリガーが代名詞を「言語的に」コントロールしているのである。一方、言語化された先行詞がない c. d. の例では、代名詞はターゲットの客に一致していかなくてはならない。ここでも、ターゲットしか不在先行詞にはなれないのである。

以上が Tasmowski-de Ryck & Verluyten の議論であるが、ここでは彼らの誤りを指摘したい。

まず(50) a. b. の例をもとに、先行文脈に先行詞がある場合は、トリガーによる言語的コントロールが義務的であるとする点である。これは明らかに誤りで、構文を換えれば次のような文は可能である。

(51) L'entrecôte est assise à la table 5. Il est barbu.

この文では、トリガー l'entrecôte は代名詞を言語的にコントロールしていない。ターゲットが不在先行詞となっている。トリガーによる言語的コントロールを受けていると逆に非文になる。

(52) L'entrecôte est assise à la table 5. *Elle est barbue.

(50) a. b. がトリガーによる言語的コントロールを受けているように見えるのは、

それが左方転位構文だからである。左方転位構文における転位名詞句と照応的代名詞の関係は、普通の文脈における先行詞と代名詞の関係よりも、はるかに厳しいことが知られている。

例えば、ふつうは許容される *anaphore divergente* は、転位構文では許容されない。

- (53) a. J'ai acheté une Toyota parce qu'elles sont économiques.
b. *Une/La Toyota, elles sont vraiment économiques.

また *accord conceptuel* も転位構文では不可能なことが知られている。

- (54) a. La sentinelle a été tuée par l'explosion. Il était en poste devant la caserne.
b. *La sentinelle, il n'a rien entendu.

(50) が示しているのは、むしろ次のような事実なのである。

「転位構文では、語用論的コネクタを用いた照応関係は成り立たない」

次に「ターゲットしか不在先行詞にはなれない」としている点であるが、ここにも誤解がある。Fauconnier は、代名詞の指示的用法で、オムレツを指さして “He left in a hurry” とは言えるが、”It left in a hurry.” とすることはできないのにたいして、ノーマン・メーラー自身を指さして、”He's on my top shelf.” とすることができると指摘している³⁷⁾。

ここで問題になっているのは、著者とその著書を結ぶ語用論的コネクタである。

ノーマン・メーラーはトリガーで、その著書はターゲットになる。”He's on my top shelf.” では、代名詞 he はトリガーのノーマン・メーラー自身をさしているので、



Tasmowski-de Ryck & Verluyten の主張とは異なり、トリガーを不在先行詞とする代名詞の用法は可能だということになるのである。実際、フランス語でも次のような文は可能だと思われる。

- (55) [Françoise Sagan をさしながら]
Elle est très lue au Japon.

ではなぜこのようなちがいが出るのかは、Fauconnier 自身が適切な説明を与えている。ポイントはメトニミーを形成しているコネクタが、開コネクタか、閉コネクタかという点である。Fauconnier によれば、著者 → 著書のように安定した関係は開コネクタで、オムレツ → 客のように一時的にしか成立しない不安定な関係は閉コネクタである。開コネクタの場合は、トリガーもターゲットも先行詞になりうるが、閉コネクタの場合は、トリガーは先行詞になれないという。

- (56) a. Plato is on the top shelf. It is bound in leather.
b. Plato is on the top shelf. You'll find that he is a very interesting author.
- (57) a. The mushroom omelet left without paying his bill. He jumped into a taxi.
b. The mushroom omelet left without paying his bill. *It was inedible.

従って、不在先行詞の場合でも、トリガーとターゲットのどちらが先行詞になれるかは、両者を結合しているコネクタの種類に依存するのであり、Tasmowski-de Ryck & Verluyten はこの点で誤っていると考えられる。

おわりに

本稿では、「談話モデル」の考え方を示し、このモデルが有効であることを、指示表現と照応表現の問題を通じて示そうとした。

まだまだ残された問題は数多いが、それについては今後の研究課題としたい。

-
- 1) 本稿の研究は、文部省の科学研究費(基盤研究C 課題番号07610492)の助成を受けて行われたものである。また本稿の内容は、平成9年度に京都大学人間・環境学研究科で行なった講義をもとにしている。
 - 2) B. Fox, *Discourse Structure and Anaphora*, Cambridge, Cambridge University Press, 1987
 - 3) *Maçon Corpus* (Université de Provence)
 - 4) M.A.K. Halliday & R. Hasan, *Cohesion in English*, London, Longman, 1976
 - 5) H.Sacks, E. Schegloff & G.Jefferson, "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation", *Language* 50, 1974
 - 6) 田窪行則、「談話管理の理論」、『言語』vol. 19, No. 4, 1990
 - 7) これはもちろん理想化されたモデルである。菅原和孝「関係と交渉のプラグマティズム」、谷泰(編)『コミュニケーションの自然誌』、新曜社、1997 には、アフリカのガイ族の民族学的調査から、会話の順番取りシステムに従わない「同時発話」の機能についての、きわめて興味深い分析がある。
 - 8) J.Lyons, *Semantics* vol. 1, Cambridge, Cambridge University Press, 1977
 - 9) W. Chafe (ed.), *The Pear Stories : Cognitive, Cultural, and*

Linguistic Aspects of Narrative Production, Norwood, Ablex, 1980

10) G. Brown & G. Yule, Discourse Analysis, Cambridge, Cambridge UP, 1983

11) G. Brown & G. Yule, op.cit.

12) G. Brown & G. Yule, op.cit.

13) G. Brown & G. Yule, op.cit.

14) G. Brown & G. Yule, op.cit.

15) このように変化する指示対象を *evolving referent* と呼ぶ。この問題については、次の文献を参照のこと。山梨正明『推論と照応』、くろしお出版、1992 ; Schnedecker, C. & M. Charolles , "Les référents évolutifs : points de vue ontologique et phénoménologique", Cahiers de linguistique française 14,1993

16) このようなモデルは、G. Brown & G. Yule, op.cit. では “discourse representation” と呼ばれている。また、Grize, Logique et langage, Ophrys, 1990 では “schématisation” , A. Berrendonner & M. J. Reicher-Bégueling, "Décalages : les niveaux de l'analyse linguistique", Langue française 81, 1989 では “mémoire discursive”, P.Bosch, Agreement and Anaphora , New York, Academic Press, 1983 では “context model” と呼ばれている概念と非常に近い。

17) 同じ概念を E. Prince, “Toward a taxonomy of given-new information”, in P.Cole (ed) Radical Pragmatics, New York, Academic Press, 1981 は、”discourse entity” と呼んでいる。

18) L. Karttunen, "Discourse referent", in J. McCawley (ed) Syntax and Semantics 7 (Notes from the linguistic underground), New York, Academic Press, 1976

19) Prince, op. cit. の分類によれば、固有名詞は *New Unused* に属する。

20) “Let us say that the appearance of an indefinite noun phrase established a ‘discourse referent’ just in case it justifies the occurrence of a coreferential pronoun or a definite noun phrase later in the text.” (Karttunen, op. cit.)

21) Karttunen, op.cit. p.375

22) J.Hankamer & I. Sag , "Deep and surface anaphora", Linguistic Inquiry 7-3, 1976

23) J. McCawley, “Where do noun phrases come from?”, in R. Jacobs & P. Rosenbaum (eds) Reading in English transformational grammar, Ginn, Waltham, 1970

24) P. Postal, P. , “On so-called pronouns in English”, in D. Reibel & S. Schane (eds) Modern Studies in English , Prentice-Hall, 1969

- 25) L.Tasmowski-de Ryck & S. P. Verluyten , “Linguistic control of pronouns”, *Journal of Semantics* 4, 1982
- 26) “In fact, all true pronouns are linguistically controlled.”
(Tasmowski-de Ryck & Verluyten 1982, op.cit.)
- 27) *Ma femme, ça bavarde trop.* のように人に用いると、軽蔑的なニュアンスがあるが、これは人を物扱いしているからである。日本語の「あれはおしゃべりがすぎる」と似ている。また *ça* は総称名詞では、一見すると人をさすことができるように見える：*Un enfant, ça casse tout.* しかし、これは総称名詞の意味するものは概念（より正確には内包的意味）であり、人ではないからである。概念は物扱いすることができる。
- 28) この意味で、代名詞 *ce* が “non encore classifié” , “non identifié” をさすという Kleiber の主張は正鵠を得ているといえる。cf. G. Kleiber, “Sur la sémantique des descriptions démonstratives”, *Linguisticae Investigationes* VIII-1, 1984
- 29) F. Corblin, “Ceci et cela comme formes à contenu indistinct”, *Langue française* 75, 1987
- 30) B. Berlin, “Ethnobiological classification”, in E.Rosch & B.Lloyd (eds) *Cognition and Categorization*, Hillsdale, Lawrence Erlbaum Association, 1978
- 31) 例文は G. Kleiber, *Anaphores et pronoms*, Louvain-la-Neuve, Duculot, 1994 より。ちなみに Kleiber は *accord conceptuel* は人の場合にのみ可能であるという観察を示すに留まり、それがなぜなのかを説明していない。
- 32) 余談ながら、*le ministre* のように伝統的には男性名詞とされてきた名詞でも、最近では女性名詞としても用いるようになった。*la ministre* という言い方は TVニュースでは耳にする。
- 33) L. Tasmowski-de Ryck, L. & S. P. Verluyten, op.cit.
- 34) “It will appear that, indeed, the class of possible absentee antecedent is severely constrained by two different sets of conditions : a set of conditions constraining the possibility of linguistic control between an absentee antecedent and a pronoun (...) , and a set of conditions constraining the possibility of pragmatic control of the absentee antecedent by a real-world object. “ (Tasmowski-de Ryck & Verluyten, op.cit.)
- 35) B. Fradin, B., "Anaphorisation et stéréotypes nominaux", *Lingua* 64, 1984
- 36) 基本カテゴリーレベル *basic level* については、Rosch, op. cit. の他に、G. Kleiber, "Lexique et cognition : y a-t-il des termes de base?", *Rivista di Linguistica* 6-2, 1994 を参照のこと。

37) G. Fauconnier, *Espaces Mentaux*, Ed. de Minuit, 1984 , 坂原他訳『メンタル・スペース』、白水社 本稿では邦訳を参照した。